

JACET-Kanto Newsletter

一般社団法人大学英語教育学会関東支部

September 30, 2019 No.13

JACET 関東支部ニューズレター第 13 号 (WEB 版) 刊行に寄せて

支部長 藤尾美佐 (東洋大学)

この6月に、新支部長として、第4代関東支部長に就任致しました。歴代の支部長には遠く及びませんが、優秀な次世代にしっかりバトンタッチできるように努めて参りたいと思います。何卒、よろしくお願ひ申し上げます(関東支部 Web 上の支部長挨拶も、お時間のあるときにご覧いただければ幸いです)。

さて、関東支部では、英語教育の向上に向けて、そしてわれわれ自身が研鑽を続けていけるよう、様々な活動を行っております。その大きな柱となっているのが、1) 関東支部大会の開催、2) 支部紀要 (JACET-KANTO Journal) の発行、3) 関東支部講演会 (および JACET 関東支部・東洋大学共催企画) の実施、4) ニューズレターの発行です。

本年度の第12回関東支部大会は、7月7日(日)に東洋大学の後援を得て、「時代が変わる・英語教育が変わる-産官学のダイバーシティへの取り組み-」というテーマで開催されました。急激な変貌を遂げる現在の日本社会を考えると、産官学の取り組みも、グローバル人材育成も、議論だけで終わらせられない状況になっています。グロー

バルな舞台でイニシアチブを取れるよう、学生を「英語学習者」から「英語使用者」に、さらに「戦略的な英語使用者」に変容させていくことは、私自身の一番の目標でもあります。大会では、ダイバーシティをキーワードに、基調講演者、内永ゆか子氏 (NPO 法人 J-Win 理事長) に、「グローバル人材の要件と英語教育」についてご講演いただき、全体シンポジウムでは、「産官学のグローバル化・ダイバーシティへの取り組み」をテーマに、産官学の代表者をシンポジストに招き、現場での課題と成果をギリギリのところまで討論いただきました。最前線の現場に基づいたお話は、どれも大変な迫力がありました。紙幅の関係で一人一人のお名前は挙げられませんが、大会運営に携わっていただいた全ての方々、ご参加いただいた方々に、改めてお礼申し上げます。

また、本年度より、毎月の運営会議後に行われる研究会が名称を変更いたしました。「月例研究会」は「関東支部講演会」に、「青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会」は、(支部長の交替に伴い開催校が変わったことも

目次

・巻頭言

JACET 関東支部長 藤尾美佐-1-

・第12回関東支部大会報告

支部大会運営委員長 新井功磨-2-

・第1回支部総会報告

支部事務局幹事 奥切恵-10-

・支部講演委員会報告

支部講演会委員会委員長 山本成代-12-

・ JACET 関東支部・東洋大学共催企画報告

支部講演会委員 青木理香-14-

・支部紀要編集委員会からのお知らせ

支部紀要編集委員長 鈴木彩子-15-

・事務局だより

支部事務局幹事 奥切恵-15-

あり)「JACET 関東支部・東洋大学共催企画」に、それぞれ名称変更しております。特に后者は、講演会だけでなく、研究手法を始めとしたワークショップなど、より幅広い企画を視野に入れたものです。皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

こうした関東支部の、そして会員の皆様の活発な研究活動は、このニューズレターを通して、また支部紀要を通して、これまで以上に発信していきたいと考えています。支部紀要では、掲載論文を増やすという目標もありますが、それ以前に、投稿そのものに価値があり、今後につながったと思っただけのような、より充実した査読コメントの返却を考えております。是非ご投稿ください。

また、支部運営に関しましては、上述のワークショップも含めた多彩な企画のほかに、JACET 本部とのコラボレーションを増やすことも考えております。まずは、11月30日(土)の JAAL in JACET に、多くの皆様のご参加、ご発表をお待ちしております。

もう一点、この支部運営は、熱心な運営委員(研究企画委員)に支えられていますが、年々増えていく学内業務とのバランスを取れるよう、合理化できるところは合理化し、働き方改革を進めてまいりたいと思います。支部研究企画委員へのご興味などありましたら、お気軽に事務局までご連絡いただければ幸いです。

今後とも、ますますのお力添えをよろしくお願い申し上げます。

第12回 関東支部大会報告

支部大会運営委員長

新井琢磨(早稲田大学)

第12回(2019年度)JACET 関東支部大会が、「時代が変わる・英語教育が変わる—産官学のダイバーシティへの取り組み—(Changing Eras & Moving English Education: Collaborations for Diversity Among Professional, Governmental and Academic Fields)」を大会テーマとし、7月7日(日)に、東洋大学の後援を得て同大学の白山キャンパスにて開催されました。基調講演には内永ゆか子

氏(NPO 法人 J-Win 理事長)をお迎えし、『グローバル人材の要件と英語教育(Global Leader Requirements & English Capability)』という演題の下、お話しして頂きました。

さらに、全体シンポジウムとしては『産官学のグローバル化・ダイバーシティへの取り組み(Latest Commitment to Diversity and Globalization in Professional, Governmental and Academic Fields)』と題して、Kyle Yee 氏(Vice Senior Manager, BTB Promotion Office, Group Human Resources Department, Rakuten, Inc.)、瀧沢佳宏氏(東京都教育庁指導部国際教育推進担当課長)、高橋清隆氏(東洋大学国際部長)の3名にご登壇頂きました。加えて、関東支部企画特別講演として、2つの発表を実施致しました。1つは、内藤永先生(北海学園大学経営学部教授)に『中小企業の海外展開を担うグローバル人材の育成—国際展示商談への学生通訳派遣—(Global Human Resources Development for Overseas Expansion of Small- and Medium-Sized Companies: Sending Students to Exhibitions Abroad as Interpreters)』というテーマでお話を頂きました。もう1つは、'Nurturing Global Citizens: Attempts to Transform Learners' Mindsets Through an English Language Program and a Service Learning Curriculum in Japanese Higher Education'の主題で、宮原万寿子先生(国際基督教大学教養学部課程准教授)にご発表して頂きました。開催校企画では、『海外に出て行く学生たち(The Diversification and Development of Student Skills When Studying Overseas)』と題して、川本亮氏(東京大学医学部学生)、Daniele Figura 氏(東洋大学経営学部学生)、佐野若菜氏(同左)の3名がその経験を語ってくれました。

この他、研究発表や実践報告、賛助会員発表も多数行われ、生憎の雨天にも関わらず150名ほどの方々にご参加頂くことができました。また、運営においては、大会実行委員長の藤尾美佐先生を中心に、東洋大学の先生方・学生アルバイトの皆

様に多大なるご尽力を賜り、おかげさまで成功裏に閉会することができました。ここに改めまして厚く御礼申し上げます。来年度の支部大会会場は未定ですが、今回以上に大勢の方々にご来場頂き、一層ご満足頂けるようなものにしていただければと存じます。

以下は、各発表の後記です。司会の先生方にご執筆頂きました。ご協力に心より感謝申し上げます。なお、賛助会員発表やキャンセルのあった発表は後記の記載がございません。

#01. 開催校企画 TOYO Hours

海外に出て行く学生たち

The Diversification and Development of Student Skills When Studying Overseas

川本亮 (東京大学 医学部 学生)

Figura, Daniele (東洋大学 経営学部 学生)

佐野若菜 (東洋大学 経営学部 学生)

本企画では、3名の大学生にそれぞれの海外体験を発表してもらい、それを基に大学の国際化について議論した。海外に行った目的は留学・ボランティア活動・起業と実験など様々で行先も異なったが、学生目線での貴重な体験が語られただけでなく、大学の体制や日本の英語教育に対する示唆もあった。一方、教育の場では学生の動機や内的変化をどう促し育てるか、また、将来につなげるかなどについて活発な意見交換がなされた。

(久世恭子・東洋大学)

#02. 関東支部企画 特別講演

中小企業の海外展開を担うグローバル人材の育成—国際展示商談への学生通訳派遣—

Global Human Resources Development for Overseas Expansion of Small- and Medium-Sized Companies Sending Students to Exhibitions Abroad as Interpreters

内藤永 (北海学園大学)

国際展示商談会に出展する地元企業の通訳と

して学生たちを海外に派遣する北海学園大学経営学部の取り組みについてご講演いただいた。本取り組みにおける学生の英語力の鍛え方や産官学連携のあり方は、English for Specific Purposesの考え方を実践する上で示唆に富むものであった。講演後の質疑応答では、本取り組みの今後の展開や企業の学生に対する評価等の質問が参加者から挙がった。全体を通して、内藤先生の本取り組みにかける熱い想いが伝わってくるご講演であった。

(中竹真依子・青山学院大学)

#03. 研究発表

L2 Motivation in First-Year Science Students

Fukuda, Tetsuya (International Christian University)

理工系の学生の英語に対する動機づけの研究である。被験者は理工系の学生と非理工系の学生で、その英語学習に対する動機の変化を調査した。その結果、理工系の学生は非理工系の学生に比べて内的な動機はやや低いが、将来の英語の必要性は認識している。理工系の内容の教材の使用がその動機を高める可能性がある。

(清田洋一・明星大学)

#04. 研究発表

A Study on In-Class Motivators for Japanese English Learners

Satake, Yukinobu (Jobu University)

A study on in-and-out-class motivators for Japanese English learners examines the exploration of in-and-out class motivating factors to increase motivating Japanese English language learners more effectively. An exploratory factor analysis was introduced and its detailed report was given.

It is found out that the most motivating latent in-class factor mainly relates to “teacher” for both high proficiency (HP) students and low proficiency

(LP) students, and communicative factor is the second or third most influential factor. Regarding the out-of-class motivating factor, the author notes that a strong ideal L2 self-factor constitutes 24% of the HP students' motivation such as a desire to use English in the future while the most powerful out-of-class motivating factor for LP students is related to "enjoyment" such as watching movies or TV dramas. As for one notable point, it is suggested that HP students are likely to attribute their out-of-class motivation mainly to their strong ideal L2 self, while LP students may keep learning out of class due to their intrinsic motivation. The author concludes by showing the necessity of further investigation in conducting structural equation modeling (SEM) analysis to explore how these latent motivating factors are related.

In the Q & A session, various questions and views regarding motivation and the in-and-out class motivators were actively exchanged. This paper presentation ended up rewarding for researchers and educators.

(Saito, Sanae; Tokai University)

#05. 実践報告

Ideal L2 Selves and Future Language Learning Histories

Morel, Robert (Toyo University)

This study reports in details on a case-study that combines future L2-self visualization with an imagined future language-learning-history activity and discusses the meaningfulness of how helpful it could be to maintain learners' motivation and clarify their language-learning goals. A precise process of this activity was shown as; (1) the students were guided through a visualization of themselves as users of English five years in the future, (2) they created language learning histories covering the next five

years to show how they became this imagined future self, imagining themselves to be the future L2 self they visualized, (3) they discussed their future language learning histories. Noticeably, student feedback after the activity and twelve weeks after doing the activity, there were changes in their awareness toward the clarification of their language-learning purposes and interest in the activity of visualization of themselves as users of English.

It is observed that the audience showed their interest in such an innovative and intriguing activity. Questions and ideas were enthusiastically exchanged in the Qs-&-As session. There followed a demonstration of the visualization in compliance with the audience's request.

(Saito, Sanae; Tokai University)

#06. 実践報告

動機づけの高い学習者における自律的学習者要因間の関係

Relationship Among Autonomous Learning Factors: A Case Study of a Highly-Motivated Learner

河内山晶子 (明星大学)

本発表は、動機付けの高い学習者の学習過程にはどのような特徴があるかを学習者要因間の関係に注目して具体的に記述することを狙いとし学習者の学習促進への力づけが主要な効果となっていることを考察するものである。学習者の振り返りの記述には学習方法への関心の高まり、自身の学習スタイルを省察するなど個々の学習を客観的に見るようになったなど自律的学習や学習者要因に気づくという意識の転換が質的分析によって明らかになったことを強調している。知見通りの特定の要因間の因果関係の活性化により要因の数値が上昇するという結果より、指導者が学習者の学習過程に積極的、かつ肯定的に関わることが学習者の学習促進への力づけになって

いるという効果の大きさが顕著となったことを示した。発表者自身の体験談を交え、指導者と学習者の関わり方の重要性を力説し、指導者の役割のあり方を問う話であった。質疑応答では動機づけの難しさ、そしてその意義について活発な議論へと展開し、結んだ。

(斎藤早苗・東海大学)

#07. 実践報告

外国語教育から第2言語教育へ—大学生から見た使う為の英語教育の在り方—

Not EFL!: Japanese Students Need ESL for Intercultural Communication

大味潤 (東京経済大学・非常勤講師)

先生ご自身が留学中に感じた「コミュニケーション能力を左右するものは英語力だけではない。それは何か?」という疑問に対する実践報告であった。「言語」と「非言語」の2側面を言語教育で同時に扱えないだろうか、という考えから、大学生・短大生を対象とした授業において、学生からのリクエストにもとづいたオリジナル教材を作成・使用し、その効果をアンケートとインタビューを通して検証した。その結果、学生の英語に対する基本態度は向上し、人前で英語を話すことは平気という意見も多くなった。今後の課題としては、教材の開発や実践への繋ぎなどがあり、今後の報告に期待したい。

(伊藤泰子・神田外語大学)

#08. 研究発表

When EFL Japanese Learners Answer English Questions in Full Sentences

Nivedita, Kumari (National Institute of Technology, Ibaraki College)

日本人学生の外国語としての英語学習における発語の誤りの研究である。たとえば、Question: What did Mr. Green say was his problem? Answer: He says that his problem is that my license expires. この

研究は英語のリーディングの授業の学生を対象に行われ、結果は Hirose(2000)および Wada(2001)の理論を裏付けるものとなった。

(清田洋一・明星大学)

#09. 研究発表

Analysis of Students' Awareness Towards EIL: Using a Measurement Scale

Nakamura, Yuji (Keio University)

Murray, Adam (University of the Ryukyus)

Videoconference を活用し多様な英語話者と実際に交流する授業を受講することで、学生の国際共通語としての英語に対する認識が変化するかに着目した研究であった。リサーチツールとしてアンケートを用い、受講前後の変化を測った結果、受講後、全体として学生は多様な英語に対し多少寛容になったことが報告された。欧州出身の学生とアジア出身の学生では多様性に対する寛容さに差異があったという点は興味深い発見であった。

(鈴木彩子・玉川大学)

#10. 研究発表

Instructional Practices and Identities in the English Medium Instruction (EMI) Classroom

Fujii, Akiko (International Christian University)

Miyahara, Masuko (International Christian University)

EMI の専門能力開発を最終目的とする研究の一部として行われた EMI に従事している大学教員のそれに対する認識と実践に関する研究報告であった。アンケートの結果から教員たちは自己の教育実践と学生の授業参加に大きな関心を寄せ、それらが大きなチャレンジであると認識していることが報告された。更なる分析のために教員とのインタビューなどを通し質的研究も行うということで、今後の報告も楽しみな研究である。

(鈴木彩子・玉川大学)

#11. 研究発表

A Longitudinal Study of the Potential of Long-Distance Learning Conducted Through Professional and Academic Collaboration: Assessing Students' English Production

Newbery-Payton, Laurence (Tokyo University of Foreign Studies; graduate student)

本研究は、ICT を用いた遠隔教育の効果について長期的に検証したものである。日本在住の学生とフィリピン在住の英語教員を ICT でつなぐことにより、よりインタラクティブでそれぞれの学習者にあった学習経験を促進することを目的とした。分析対象者の 4 人の学生の反応は好意的であり、対象者の発話を CEFR-J を用いて評価・分析したところ発話レベルの向上傾向が見られた。

(佐竹由帆・駿河台大学)

#12. 実践報告

人工知能を利用した英語学習システム

Artificial Intelligence for English Learning System 矢野真 (東京電機大学)

AI 技術を利用した英語学習アプリケーションを紹介頂き、その機能と期待できる効果についての報告が行われた。先行研究において、スマートフォンを用いた英会話アプリを利用した学生に高い動機づけとアプリの継続利用への意欲が見られたことを踏まえ、発話した音声の自動採点システムや、AI を対話相手としたロールプレイング機能を有した本アプリは、利用者の動機づけ及び学習効果の向上を期待させるものであった。

(佐藤健・東京農工大学)

#13. 研究発表

ICT を用いた高大連携・産学連携による交流型高校英語スピーキング教育

Interactive English Speaking Education Through ICT: Collaborations Among High School, University and Industry

望月圭子 (東京外国語大学)

張正 (東京外国語大学・特別研究員)

星澤美衣 (株式会社 産経ヒューマンラーニング)

川野友里恵 (リングハウス教育研究所)

天野優里 (東京外国語大学・大学院生)

ICT 技術を用いた高校生の英語スピーキング活動を、高校・大学・企業が連携して支援するプロジェクトの活動報告が行われた。長野県と徳島県の県立高校の学生にオンライン英会話レッスンを企業が提供し、その学習過程の観察を通じた学習サポートを大学が行うものであった。大学入試での 4 技能評価が求められる中、地方の学校ではその変化への準備が十分とはいえない場合が多く、ICT を利用した共同的な学習プラットフォーム構築の重要性を感じる内容であった。

(佐藤健・東京農工大学)

#15. 実践報告

ミスから学ぶ「問診英語」の導入

Developing “The Medical Interview” Lessons Through Trial and Error

木村美由紀 (東京慈恵会医科大学・非常勤講師)

発表者の担当している「問診英語」という授業において、より質の高い「問診英語」の授業の確立を目指すために、発表者がいくつかのデータを学生から収集し、それを分析・考察した発表であった。この実践研究はパイロット研究であり、学生達が作成した「問診の会話」を一義的にデータとしてカテゴリー分類し、その中で、学生達は言語学的にどのようなミスをし、それらのミスをどのように指導すべきかを論じた。

(遠藤雪枝・昭和大学)

#16. 実践報告

大学における英語学習支援プログラムのスピーキング活動に CEFR を組み入れる試み

An Attempt to Incorporate CEFR Into Speaking Sessions in a Japanese University's English

Learning Support Program

周育佳（東京外国語大学）
金子麻子（東京外国語大学）
長沼君主（東海大学）

本調査は、東京外国語大学で実施しているスピーキング・セッションをより効果的にするために、CEFR に基づきレベル設定、タスク選定、フィードバックシートの作成を行って編成を試みたものである。実施後のアンケートによると、学生からは目標があることで何を話すべきか意識できる、英語アドバイザーからはレベル別タスク設定が効果的であるという意見がでた一方で、学生の間でセッションの目標が浸透しきっていないなどの問題点も見られた。

（佐竹由帆・駿河台大学）

#17. 研究発表

映画翻訳が英語学習にもたらす有効性—
Authentic な教材から学ぶ—
How Translating Movies Affects English Learning:
Learning From Authentic Materials

山科美智子（埼玉女子短期大学）

この研究は、映画の英語スクリプトを日本語に翻訳する活動のメリットに基づき、授業で大学生が映画翻訳を実践した際に身に着く英語力と意識を検証したものである。結果は、idiom を翻訳することの困難さ、ことばの背景にある価値観や認識の違いに沿った訳し方、英語教材とは異なる音声のスピードやトーンなど、気づきが多いことが判明した。フロアからは、同じく authentic な英語に触れられる映画のメリットに関する意見が寄せられた。

（小屋多恵子・法政大学）

#18. 実践報告

地域連携英語活動と教育的示唆
Community English Class and Pedagogical
Implications

鈴木栄（東京女子大学）

前田隆子（明海大学）

東京女子大学の学生が杉並区と連携し児童の英語学習を支援する活動実践の報告であった。学生が実際に児童と触れ合うことで、自己の英語力、異文化に対する態度などを見つめ直したり、地域の大人たちに話を聞いたり、他の学生と協働することで自主性を伸ばしていったことが報告された。質疑応答では今後の英語教科化により小学校英語のあり方などが話題になり、活発な議論が行われた発表であった。

（鈴木彩子・玉川大学）

#19. 研究発表

英語指導者の資質・能力に対する小学校現職教員の意識と小・中・高の連携の課題—小学校現職教員対象「J-POSTL エレメンタリー」全国調査の結果から—

Findings From “J-POSTL Elementary”
Nationwide Survey Targeting Elementary School
Teachers

中山夏恵（文教大学）

山口高領（秀明大学）

久村研（田園調布学園大学・名誉教授）

小学校の英語教員に求められる資質能力とは何かを明らかにするため、中等教育英語教員用に開発された J-POSTL の記述文を小学校教育に文脈化する試みがなされている。この発表では、現職教員の意識と教育経験によってその意識がどのように異なるのかを調べるために小学校常勤現職教員を対象に行われた全国調査の結果が報告された。自立学習を促す能力に対する肯定度が最も低く、さらに英語科教員免許を持っていて中高での教育経験のある小学校現職教員と、免許を持っていない教員の間、74 項目中 11 項目において有意差が見られた。現在も進行中の研究であり、さらなる報告が楽しみである。

（伊藤泰子・神田外語大学）

#21. 研究発表

大学生が使用する英語辞書形態と英語熟達度に関する実態調査

A Study on Dictionary Type Used by University English Learners in Relation to Their English Proficiency

藤田恵里子 (江戸川大学)

本研究では、大学生が使用する辞書形態についてご発表いただいた。近年の辞書を取り巻く環境の変化を受けて、紙辞書と電子辞書に、オンライン辞書とオンライン翻訳を加えた辞書の使用状況、および英語熟達度との関係を検証した。結果として、辞書の選好は熟達度に関わらずオンライン辞書が最も高く紙辞書が最も低かった。また、熟達度の高い学習者はそうでないものよりもやや電子辞書を使う傾向が示唆された。質疑応答では、本研究の参加者以外の熟達度層を含めた検証の可能性などについて議論された。

(鈴木健太郎・共栄大学)

#22. 関東支部企画 特別講演

Nurturing Global Citizens: Attempts to Transform Learners' Mindsets Through an English Language Program and a Service Learning Curriculum in Japanese Higher Education

Miyahara, Masuko (International Christian University)

This presentation examined the processes involved in developing and promoting students' "global mindsets" in higher education. Specifically, the program currently being implemented at International Christian University (ICU) was described. This program consists of three main pillars. First, students take courses in an English for Liberal Arts Program. These courses enable students to interact with academic texts that are related to the majors offered at ICU. Second, students can participate in an International Exchange Program—this helps them

transition from "language learners" to "language users." Within this exchange program, students can focus on developing their language proficiency and/or studying a field of interest. Third, ICU offers a Service Learning Program. This program plays an important role in developing a global mindset within the students. Students learn through providing service to others within a domestic program or an international program. These three pillars provide the basic support and experience through which students can become "global citizens."

(Wistner, Brian; Hosei University)

#23. 研究発表

自己決定理論研究の課題—下位理論への理解と学習者の個人差—

Issues of Self-Determination Theory Research: Understanding Mini-Theories and Individual Differences

馬場正太郎 (東京外国語大学・大学院生)

内発的動機づけを高め、学習者の well-being を実現することを最終目標に掲げる自己決定理論の研究において、その6つの下位理論を理解する必要があることが述べられた。これまでの自己決定理論の研究では、動機づけ変数と他の変数との関連を、variable-centered approach により研究されてきたが、学習者の個人差を検証するにはこれのみでは不十分である。これを person-centered approach と組み合わせることで、変数間の関連と個人差の、2つの側面から学習者を捉えることが可能となり、有用な支援の提供ができることが主張され、自己決定理論研究に新たな地平を拓く可能性が示唆された。

(田口悦男・大東文化大学)

#24. 研究発表

留学前後の語学力・留学体験による短期語学研修の有効性の検証

Short-Term Study Abroad Program: Experiences, Impacts and Language Proficiency

大石敏也（首都大学東京・非常勤講師）

米山かおる（首都大学東京・非常勤講師）

竹田恒太（首都大学東京・非常勤講師）

約1ヶ月の様々な短期研修の効果を質的、量的に検証することを目的とした研究で、留学前後の英語力測定のために CASEC を、また意識の変化の調査のためにアンケートを実施した。その結果、英語力に関しては平均点が12点上がったが、700点台の学生の場合は留学後に下がってしまった。その原因はさらに検証する必要がある。積極性が高まり、発話することへの抵抗感が減ったという傾向も見られ、留学は全体的に効果的であるということが確認された。今後の課題としては、CASEC がこの研究の目的に合うテストだったかどうかを検証する必要があることが挙げられた。

（伊藤泰子・神田外語大学）

#25. 実践報告

Soft CLIL Learning Materials for Pre-Service Teacher Training in Japanese Universities

Caraker, Richard (Nihon University)

Professor Richard introduced how to use CLIL to teach applied linguistics for pre-service teacher training course in a Japanese university. He designed soft CLIL curriculum and teaching materials for students, and the result showed that students can develop their English ability and applied linguistics knowledge together. This study has very useful application for EMI/CLIL courses in high education in Japan. The audience were very interested in his presentation, asked some questions like students' English level, students' agency and textbook.

（荊紅濤・創価大学）

#26. 研究発表

EAP プログラムの設計と実践—学習者調査からのアプローチ—

The Design and Implementation of an EAP Program: A Needs Analysis-Based Approach Guided by the Feedback Results of Student Surveys

平井清子（北里大学）

清水友子（拓殖大学・非常勤講師）

本研究は、大学1年次の授業を通し、大学3年次以降無理なく ESP 教育へ移行できるように、大学入学時までに十分に育成されていない力を伸ばすプログラムを考案し、その効果を実証した成果の報告であった。Bloom 改訂版タキソノミーを認知指標として、段階的な足場掛けの活動を行い、深い学びを促す授業を実践したとの報告であった。グループでのリサーチ学習には日本語を使ってもよいのか、等の質問が出て、盛んな意見交換が行われた。

（佐野富士子・常葉大学）

#28. 研究発表

ビジネス E メール・ライティング能力の構成要素を探るケース・スタディ

A Case Study for Identifying Factors of Business E-Mail Writing Ability

戸田博之（東京大学・大学院生）

本発表は、大学生・大学院生にビジネスメールを日英両方で書かせ、かつ、それぞれに対して「自信」の程度を尋ね、そこから得られた「自信」の程度データを分析するものであった。フロアからの意見としては、「自信」の程度データだけでなく、それぞれ書いたメール内容を評価したものも含めてデータ分析をするべきではないかという意見などが提出された。

（山口高領・秀明大学）

#29. 実践報告

ディベートを取り入れた Writing の指導

A Debate-Integrated Writing Course

峰松和子（跡見学園女子大学）

発表では、ディベートを取り入れたライティング指導の理論的背景、具体的手順、その効果が報告された。過程を重視して適宜指導を加えつつ十分な事前準備を積み重ねてディベートに臨ませることは、物事を両面から見る多角的思考を可能にすることが述べられた。またその上で「自分は最終的にどう考えるのか」の深い判断力が養われる一方、自分と異なる意見を持つ者をどう説得するか論述力も鍛えられることが報告された。

（河内山晶子・明星大学）

第1回支部総会報告

支部事務局幹事

奥切恵（聖心女子大学）

2019年7月7日(日)に、東洋大学8号館8B11教室において、2019年度第1回支部総会が開催されました。支部総会では、2018年度事業報告・会計報告、2019年度事業計画についての説明が行われました。以下に内容を記載いたします。なお、会計報告は省略します。

■2018年度事業報告■

I. 大会、セミナー等の開催（1号事業）

(1) 支部大会の開催

名称：2018年度関東支部大会

日時：2018年7月3日（日）

場所：神田外国語大学

大会テーマ:英語教育におけるアクティブラーニングの課題と可能性

研究発表 10 件、実践報告 11 件、賛助会員発表 2 件、ワークショップ 1 件、開催校企画 1 件、関東支部企画 5 件

(2) 支部講演会の開催

名称：青山学院英語教育研究センター・大学英語教育学会（JACET）関東支部共催英語教育講演会

場所：青山学院大学

規模：毎回約 40 名

日時と内容：

日時：2018年4月14日(土)16:00~17:30

場所:青山学院大学青山キャンパス

題目:「J-POSTL を活用した英語教員養成」

講師：清田洋一(明星大)・吉住香織(神田外語大)

日時:2018年9月8日(土)16:00~17:30

場所：青山学院大学青山キャンパス

題目:「英語アカデミックライティングとプレゼンテーションのデータ収集と研究、そして教育」

講師：奥切恵（聖心女子大学）

日時：2018年11月10日(土)16:00-17:30

場所：青山学院女子短期大学

題目:「高校生の英語はどのように伸びるのか」

講師：片桐一彦（専修大学）

日時：2018年12月8日(土)16:00-17:30

場所：青山学院大学総研ビル（14号館）

題目:「大学における通訳・翻訳指導-理論と実践のギャップをどう埋めるか」

講師：田中深雪（青山学院大学）

日時：2019年1月12日(土)16:00-17:30

場所：青山学院大学

題目:「非言語コミュニケーションと英語教育」

講師：野邊修一（青山学院大学）

(3) 支部月例研究会の開催

名称：関東支部月例研究会

場所：青山学院大学

規模：毎回約 40 名

日時と内容：
日時: 2018年5月12日(土)16:00~17:20
場所: 青山学院大学青山キャンパス
題目: 「言語教育におけるナラティブ分析」
講師: 宮原万寿子(国際基督教大)

日時: 2018年6月9日(土)16:00~17:20
場所: 青山学院大学青山キャンパス
題目: 「英語4技能試験に求められる語彙知識と語彙学習法」
講師: 萱忠義(学習院女子大)

日時: 2018年10月13日(土)16:00-17:20
場所: 聖心女子大学
題目: 「今後の悉皆英語教育」
講師: トム・ガリー(東京大学)

II. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の刊行(2号事業)

(1) 『JACET 関東支部紀要』第6号
(英語名: *JACET-KANTO Journal*)
日時: 平成31(2019)年3月31日
規模: 約1100冊

(2) 「JACET 関東支部ニューズレター」

①2018年9月30日(第11号)

②2019年3月31日(第12号)

※JACET 関東支部ホームページに pdf で掲載

III. その他(5号事業)

(1) 支部総会の開催

名称: 2018年度第1回、第2回関東支部総会

①日時: 2018年7月3日

場所: 神田外国語大学

②日時: 2018年11月10日

場所: 青山学院大学

目的: ①2017年度の支部の事業報告、会計報告
2018年度の支部の事業計画

②2019年度の支部の事業計画、予算案
および人事案の審議

(2) 支部役員会の開催

名称: 関東支部運営会議

日時: 2018年4月14日、5月12日、6月9日、9月8日、10月13日、11月10日、12月8日
2019年1月12日、3月9日

場所: 青山学院大学

■2019年度事業計画■

I. 大会、セミナー等の開催(1号事業)

(1) 支部大会の開催

日時: 2019年7月7日

場所: 東洋大学

規模: 約200名

(2) JACET 関東支部・東洋大学共催企画講演会の開催

日時: 2019年4月13日、9月14日、11月9日、12月14日、2020年1月11日の5回を予定

場所: 東洋大学

内容:

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的を実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模: 毎回約40名

(3) 関東支部研究会の開催

日時: 2019年5月、6月、10月の3回を予定

場所: 東洋大学

内容:

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表

する講演会を定期的実施する。

- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 40 名

Ⅱ. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の刊行 (2号事業)

(1) 『JACET 関東支部紀要』第 7 号 (英語名: JACET-KANTO Journal)

日時：2020 年 3 月 31 日

規模：約 1100 冊

(2) 「JACET 関東支部ニューズレター」第 13・14 号

日時：①2019 年 9 月 30 日 (第 13 号)

②2020 年 3 月 31 日 (第 14 号)

目的：支部活動の動向や支部会員への英語教育に関する情報提供と情報交換を行う。

※JACET 関東支部 HP に pdf で掲載

Ⅲ. その他 (5号事業)

(1) 支部総会の開催

名称：2019 年度第 1 回、第 2 回関東支部総会

日時：①2019 年 7 月 7 日

②2019 年 11 月 9 日

場所：東洋大学

目的：①2018 年度の関東支部の活動、会計報告、および 2019 年度の関東支部の活動計画、予算案および人事案を示す。

②2020 年度の関東支部の活動計画、予算案および人事案の審議・承認を行う。

(2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議

日時：2019 年 4 月、5 月、6 月、9 月、10 月、11 月、

12 月、平成 31 (2019) 年 1 月、3 月

場所：東洋大学

目的：支部の運営における審議、計画の立案を行う。

支部講演会報告

支部講演会委員会委員長

山本成代 (創価女子短期大学)

■2019 年度上半期活動報告■

2019 年度上半期は、5 月、6 月の 2 回にわたって支部講演会を開催した。5 月 11 日に村上加代子先生 (甲南女子大学人間科学部総合子ども学科准教授)、6 月 8 日に西川千春先生 (公益財団法人笹川スポーツ財団特別研究員、明治大学経営学部兼任講師 他) をお招きした。村上先生のご発表には 50 名近くの参加者があり、「発達障害のある児童生徒の英語学習」というテーマに興味を持たれる先生方や研究者の方々が多いたことが如実に表れていた。時間を超過しての熱心なご発表に参加者も引き込まれていた。西川先生のご発表は、東京オリンピックを 1 年後に控えて、ボランティアなどの参加者の実践的な興味に関する質問などがあった。発表詳細については、後述の支部講演会報告・概要を参照されたい。

■上半期支部講演会 発表報告・概要■

日時：2019 年 5 月 11 日 (土) 16:00-17:20

場所：東洋大学白山キャンパス 1 号館 1506

教室

講師：村上加代子先生 (甲南女子大学人間科学部総合子ども学科准教授)

日本語題目：発達障害のある児童生徒の英語学習における課題

英語題目：Problems of English Learning and Teaching for Students with Developmental Difficulties in Japan

報告：本講演には、ゼミ生を含めて全体で 49 名の参加者があった。中には小学校教員を目指している学生もいて、熱を帯びた講演会となった。途中で出席者を巻き込みながら学習障害についての話が進められたので、非常にわかりやすく、英語でのディスレクシアの現状も理解できた。発表概要は以下に記載する。

発表概要：英語教育において学習困難を含む発達障害のある児童生徒の存在は決して珍しくない。特別支援教育の推進によって通常学級での対応は一層求められている。しかし教科ごとの工夫や対策となると、ほとんどお手上げ状態であり、特別支援教育現場でも多くの生徒が「英語はあきらめる」しかないと言われている現状にある。しかし小学校からの教科化、そして小中高の連携が進められている今、こうした現状を早急に変えていかねばならない。本発表では、発達障害の特性と事例、人口の 10%にも及ぶと言われる英語圏の読み困難（ディスレクシア）とその認知的要因について概説し、英語圏での教材等について紹介する。子どもの躓きを特別支援教育、英語教育の双方が協力しながら解決していくことが大切である。英語圏では必須と言われるフォニックスや音韻認識指導についても、日本の子どもの発達（レディネス）を十分に考慮しながら、誰が、いつ、どのように、何をを用いて指導するのかなど具体的な指導対策について今後検討を進めていく必要がある。

日時：2019 年 6 月 8 日（土）16:00-17:20

場所：東洋大学白山キャンパス 1 号館 1506 教室
講師：西川千春先生（公益財団法人笹川スポーツ財団特別研究員，明治大学経営学部兼任講師 ほか）

日本語題目：「オリパラ運営における共通語：英語の重要性」～大会ボランティアプログラムを例として～

英語題目：“English, the common language of Olympic operation” - the volunteer programme by way of illustration

報告：本講演では、ご自身のオリンピック・パラリンピックでの豊富なボランティアの体験を踏まえつつ、オリ・パラにおけるボランティアの概要や、西川先生がご活躍された言語サービスの詳細について、具体的な説明がされた。加えて、その教育的意義についても報告された。実際のボランティア経験時に着用されていたユニホームや、関連の書籍・動画等も準備され、臨場感あふれるご講演となった。質疑応答では、ボランティアプログラムの参加についてや、その教育的活用に関する質問等が寄せられ、参加者の関心の高さが窺えた。参加者 13 名。発表概要は以下に記載する。

発表概要：オリンピックにおいてはフランス語と英語が公用言語とされるが、現場の運営での共通語は英語である。国際メガスポーツイベントの運営、特に世界中から集まる運営スタッフ、関係者、選手とのコミュニケーションにおける英語の重要性をボランティアプログラム、特に言語サービスの活動を通じて考察する。ボランティアの考え方やロンドン、ソチ、リオ大会におけるボランティアプログラムの概要を紹介し、東京大会の課題についても考える。また将来言語を生かした仕事に就きたいと願う学生にとっての貴重な経験になることについても触れる。

■2019 年度下半期活動計画■

2019 年度下半期は、10 月 12 日（土）に酒井志延先生（千葉商科大学教授）をお招きして、「外国語教育が揺らす学習者の価値観—グローバル化社会と機械翻訳の時代に何を教えるのか」という題目でご発表をお願いする。東洋大学（教室未定）にて 16:00~17:20 開催予定。

JACET 関東支部・東洋大学共催企画講演会

(第1回) 報告

支部講演会委員会

青木理香 (東洋大学)

■JACET 関東支部・東洋大学共催企画講演会

(第1回) 報告■

日時: 2019年4月13日(土) 16:00-17:30

場所: 東洋大学 8号館7階 125周年記念ホール

題目: グローバル人材教育と学習成果分析

講師: 芦沢真吾 (東洋大学)

本講演では、学生に効果的な「気づき」をもたらし、異文化感受性を高めるためのEポートフォリオの活用方法について、ご自身のご経験を交えながらお話しいただいた。まず、先生ご自身が留学なさるきっかけ、そして現在先生が現在取り組まれている National Evaluation Framework、UMAP、「留学のすすめ.jp」などのご活動を紹介していただいた。

その上で、東洋大学における国際交流・国際教育プログラムにおいて、学生の学びがどのように可視化されているかを概説いただいた。海外研修プログラムに参加する学生は全員 IDI (The International Development Inventory) を研修前後に受験し、自らの異文化感受性が研修を通してどのように変化したか、数値として客観的に理解できるようになっている。しかし、その数値結果だけでは、海外研修の multilayer な影響、longitudinal な影響を十分に捉えられない。それを解決するため、Eポートフォリオを通して質的に変化を観察することで、学生に自分自身の成長に気づかせ、学びの可視化を目指していることを語られた。

東洋大学が独自に開発したEポートフォリオはSGUの目標に対応しており、国際交流活動だけでなくレポート・語学試験の結果・ラーニングセンターの学習履歴・教員のコメント・学生同士の評価など、学生の学習プロセスが全て集約されてい

る。そのため、学生が自分の学びの成果を確認し、今後どのような学習に取り組めばよいかを自分で考えることができる。さらに、EポートフォリオをIR的に活用することで指導したことのない学生の学びプロセスを把握でき、チームティーチングにも活用することができるため、教員にとっても大きなプラスとなっていることが明示された。

実例として、海外研修を複数回経験した学生のEポートフォリオが取り上げられた。この学生の振り返りレポートを見てみると、学生の4年間の学びにとって最初の研修がかなり重要な役割を果たしていることがわかる。これは渡航履歴やIDIの結果だけ見ても測れない情報であり、学びの向上を正確に観察するためには一つの測定方法に頼ってはいけないことがわかる。IDIのようにリニアな理論と、Eポートフォリオの質的な記録を合わせて活用することで、価値観や構造様式などを含む複雑な成長の把握が可能になることが示唆された。

このように、Eポートフォリオを通して、学生は4年間省察、自己評価をしながら学習を進められることが理解できた。質疑応答では、メンター・メンティーを利用した再振り返り、ネガティブな省察の活かし方、大学間におけるディプロマの電子的やり取りなどについての質問が出て、グローバル人材育成に対する関心の高さがうかがえる講演会となった。

支部紀要編集委員会からのお知らせ

支部紀要編集委員長

鈴木彩子 (玉川大学)

■支部紀要編集委員会からのお知らせ■

紀要編集委員会は2020年3月の第7号の発行に向けて準備を進めています。例年通り、7月20日に応募原稿を締め切り、第一次査読(8月~9月)

が査読者の先生方の協力の下、現在進行中です。今後、年内に全ての審査を終え、年明け（1月～2月）には採録論文の編集・校正作業へと移っていきます。

2013年に「学会誌」から移行しました「紀要」は今年度で7年目を迎え、委員会の体制が大きく変わりました。創刊から6年間、紀要編集・発行にご尽力いただいた伊東弥香先生（東海大学）から引継ぎ、私が委員長を務めることになりました。引継ぎ後、委員長としてまず驚いたことは、「これだけのものをゼロから作り上げてくることに、どれだけの労力が費やされたのか」ということでした。一読者として紀要を手取るだけでは分からなかったことが非常に多くあることに改めて気づかされました。そのため、まずは、伊東先生をはじめ紀要の創成期を支えて下さった方々に、多大なる感謝を申し上げたいと思います。

その仕事の量と複雑さに圧倒されながら、私は4月に2代目の委員長としてスタートを切りましたが、紀要の土台は出来上がっていることから、ここからの数年を紀要の「成長期」と捉え、編集を進めていくことにしました。同時に、昨今の大学での教員の業務増加という現実も鑑み、我々委員の携わる作業の効率化を図ることも必須であろうと考えました。そのため、これまでのやり方をただ踏襲するだけでなく、改変を加えていくことが必要であると判断した幾つかの作業に、委員たちと話し合いながら、変更を加え始めています。それらの多くの事柄はまだ検討の段階にあるため、このような紙面で報告するに至りませんが、どのようにすれば紀要が支部会員の研究・教育活動に貢献できるかを念頭に、今後の編集作業を進めて行く予定です。支部会員の皆様には、このような過渡期にある紀要編集委員会の活動にご理解・ご協力を頂きますと幸いです。

事務局だより
支部事務局幹事
奥切恵（聖心女子大学）

■JACET 関東支部・東洋大学共催企画のお知らせ■

下記のとおり、関東支部講演会及び東洋大学共催企画を実施いたします。多くの皆さまの参加をお待ちしております。詳細は支部 HP、支部会員 ML でお知らせいたします。

(1) 2019 年度支部講演会

日時：2019 年 10 月 12 日（土）16:00-17:20

場所：東洋大学

題目：「外国語教育が揺らす学習者の価値観 — グローバル化社会と機械翻訳の時代に何を教えるのか—」

講師：酒井志延（千葉商科大学商経学部）

**(2) 2019 年度今後の関東支部・東洋大学共催企画
開催予定**

2019 年度第 3 回共催企画

日時：2019 年 11 月 9 日（土）16:00-17:30

2019 年度第 4 回共催企画

日時：2019 年 12 月 14 日（土）16:00-17:30

2019 年度第 5 回共催企画

日時：2020 年 1 月 11 日（土）16:00-17:30

■住所変更届提出のお願い■

支部会員の皆様に、支部大会のご案内や支部紀要を確実にお届けするために、転居の際には、JACET 本部事務局へ住所変更届けを提出してくださいませよう、どうぞよろしく願いいたします。

***JACET-Kanto Newsletter* 第13号**

発行日：2019年9月30日

発行者：JACET 関東支部（支部長 藤尾美佐）

編集者：佐野富士子、下山幸成、

齋藤早苗、長田恵理

発行所：〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学経営学部会計ファイナンス

学科

藤尾美佐 研究室内